
Ist

ここえ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I s t

【Nコード】

N 9 6 1 2 P

【作者名】

こごえ

【あらすじ】

大学生、朝倉宮史の周りでは、享楽主義者の友人や楽観主義者の先輩、悲観主義者の後輩と一筋縄ではいかない連中が巻き起こしたり巻き込まれたりする厄介事ばかり。何かと巻き込まれてしまう宮史だが、そんな彼もまた、一筋縄ではいかない現実主義者なのだ。

プロローグ（前書き）

初投稿になります。

拙い文章ですが最後までお付き合いいただけると幸いです。
よければご意見ご感想などもお聞かせください。

プロローグ

四月二十七日

「ねえねえ。阿藤梨絵って知ってる？」

女子が後ろの席の男子に話しかけていた。

「アトリエ？」

そう聞き返す男子はほとんど顔を上げようとしない。今現在、彼は机上に広げられたノートと向き合うのに手一杯だった。女子はそんな男子の様子を見て、不満げに言葉を返す。

「違うよ。阿藤梨絵。人の名前」

「そんな出来すぎた名前の知り合いはいないな。それって何年生？」

「それがね、わからないの」

「……は？」

女子からの返答に、思わず顔を上げて聞き返す男子。どういう意味かと問いただすより早く、女子は話し始める。

「最近流れてる噂だよ。阿藤梨絵はその中に出てくる名前」

「……ああ。そういえば聞いたことがあるかも」

男子の生返事を満足そうに聞いてから女子は続ける。周りを気にしてか、やけに声は小さかった。

「阿藤梨絵の名前が書かれた落とし物を拾って、誰にも見つからずに鞆の中にいれておき、一週間後に校内の何処かに落とす。そうすればその人には幸福が訪れる。ただし」

「ただし？」

「一週間の間に誰かに見つけれちゃうと不幸が訪れる。その代わり、持っていることを自分から告げた場合、告げられた人に不幸が訪れる」

説明を終えた女子に男子は訊ねる。

「実際に見たことないけど……。ただの噂じゃないの」

懷疑に満ちたその声も、女子に倣って小さかった。対する女子も一層声を潜めて告げる。

「幸福云々はともかくね。入学してすぐに来なくなった女の子が一年生にいるんだよね。それがどうも、本当は行方不明らしいよ。で、阿藤梨絵の落し物を持ってたんだって」

「どうしてそれがわかるの？」

「密告サイトっていうのがあるんだ。落し物を持っている人を見つけたらそのサイトに書き込むの。その子の名前もそこに書いてあったらしいよ」

深刻そうな顔の女子に対して、男子は深刻のそれとは違った様子で考え込んでから言う。

「行方不明ねえ……。家族が搜索願いで出出したの？」

「え？」

予想外の質問に面食らう女子。答えを持たない彼女は、自身の知るところだけ答える。

「いや、わからないけど……。少なくとも二週間近く学校に来てないって」

「それで行方不明だと考えるのは早計だし、ましてや落し物の呪いと関係があると決め付けるのは現実的じゃないよ。夢見がちな新入生が現実と直面して学校に来なくなる、なんてこの時期にはよくあることだと思うし」

「でも誰も連絡がつかないって言ってるし……」

「密告されて人間不信にでもなってるんじゃない？少なくとも失踪なんて自分の意志でもできるんだし。阿藤梨絵さんとやらがどうこう関わってくる問題だとは思えないね。もちろん可能性の一つとして発想するのは良いことだと思うけど。だからって確証もないのにも事実であるかのように吹聴するのはあまりおススメしないな」

男子の反応はいまいち薄い。それきり彼はノートに向き直ろうとするが、女子がそれをさせてくれなかった。

「でもでも、話はそれだけじゃ終わらないんだって。ほら、注目」

手を叩いてまで注意を喚起するあたり、これは女子のとおきなのだろう。

「実は、その阿藤梨絵って人を調べたらね……」

女子は殊更にトーンを下げ

「存在しなかったんだよ！そんな人」

力強くそう告げた。が、男子はというと、すでにペン先を忙しくノート上に走らせていた。すっかり興味を失ってしまったらしい彼の様子は倒置法まで使った女子からするとひどく気に喰わない。

「ちよつと、なんでそこで驚かないの」

おかしい。とにかくおかしかった。女子が落し物の話をすれば誰もが皆不気味そうに眉を顰め、行方不明のことを教えれば身を震わせ、阿藤梨絵の真実を告げれば戦慄を覚えるはずだった。少なくとも、これまで話を聞かせた友人たちは皆一様に恐れ慄いたのは事実なのだ。だというのに、先程の質問といい、あまりに薄い反応といい、この男子はおかしかった。

「だって不幸を呼ぶ落とし物の持ち主が存在しなかったってだけでしょ」

もはや視線すら上げない男子の様子に女子もムキになる。

「だって……。全校生徒に過去の卒業生、それどころか市民全員も調べたんだよ」

不満げな女子の言葉に、男子は突然ペンを止めたかと思うと

「十秒でいいから向こうを見ていてくれない」

「なんで？」

「いいから。ちよつと見せたいものがあって」

不意の申し出に訝しむ女子。話の腰まで折られて、苛立たずにはいられない。そんな女子に反比例する形で、極めて冷静に男子は言う。「阿藤梨絵が存在すること、阿藤梨絵っていう名前が存在することじゃ話が別でしょ。ほら」

十秒後、再び振り向いた女子の目の前には、一冊の教科書が突きつけられていた。わけもわからず抗議の声を上げようとする寸でのと

ここで、彼女は見つけてしまった。

教科書の隅に書かれた、阿藤梨絵の名前を。

「これは……」

呆気にとられてそれ以上何も言えない女子に、男子はあっさり種明かしをする。

「これは今俺が書いたんだよ」

そのまま手にした教科書を読み上げるかのような語調で続ける。

「直接関係がはっきりしない密告と失踪。偶然で片片付けられそうなそれらを奇妙な噂たらしめるのが、存在しない阿藤梨絵の名前だ。でも書いてあるだけの名前なら、そんな人が存在しなくてもちつとも不思議じゃないよね」

結びに終了とばかりに教科書を閉じ、鞆に閉まった後で再びノートに向きなおった。

「……朝倉君って夢がないんだね」

その反論のことごとくを現実的見地から否定された女子は、男子をそう評した。それは何としても男子を怖がらせてやろうと意気込んだ女子の敗北宣言に他ならなかった。

朝倉と呼ばれた男子は、首を傾げつつ答える。

「そうかな？俺はただ、呪いとか不幸とか、そういう形のない曖昧なもので片付けるより、現実在即していて理にかなっていた方が受け取りやすいだけだよ」

それを世間では夢がないと言うのだろう、と女子は思う。思うだけで口にはしない。言えば先刻同様、講釈するかのような語り口で長々と喋ること請け合いだと思ったからだ。

実は、彼女がこの男子と話するのは始業以来これが二度目である。かくして彼女は、この男子が現実主義者であるということを認識したのだった。

「でもさ」

ふと、気になったことを女子は訊ねることにした。この男子に聞けば、何でも現実的な答えが返ってくると期待して。

「なんで阿藤梨絵なんだろうね。こんな出来すぎな名前」

その質問に男子、朝倉は

「それはわからないな」

彼女の期待を大きく裏切る答を出す。

「だって俺は阿藤梨絵さんじゃないから」

至極現実的な答には違いなかったのだが。

○

朝倉宮史が通うのは、乙山市内にある乙山鈴帝学園大学という私立大学である。キャンパスは一つしかないが、その敷地は各学部棟、大型の教室や最新の設備を持った教室を備えた四つの校舎、図書館、食堂、グラウンドなどを有しながらも尚余裕のある広大なものとなっていた。

その学内で、第二図書室は最も人気の少ない教室だった。少なくとも、宮史はそう考えている。

というのも、元々は図書館から溢れた本を受け入れただけの倉庫以上教室未満の扱いに過ぎず、第二図書室という名称も便宜的に付けられたものである。そのため校内見取り図すら載っておらず、その存在を学生たちに知られているかも怪しかった。

そんな第二図書室の管理を、一身上の都合から宮史が引き受けたのはつい先日のことである。なんでも去年まで自発的に管理をしていた学生が卒業してしまい、新たに管理人を選出せざるをえなくなったらしい。二つ返事で依頼を引き受けた宮史ではあったが、第二図書室内の惨状を目の当たりにして驚愕すると同時に後悔することになる。

贅沢な広さを有する部屋には所狭しと本棚が立ち並び、溢れんばかりの本を詰め込まれた段ボール箱はそこかしこに散乱していた。とうとうそれらの収納からも溢れた本はあちこちで山を成しており、既に一学校の図書室と呼んで差し支えないほどの蔵書量だった。

その中を掻き分けて宮史は仕事に取り掛かる。作業は先日引き続き、紛失した貸し出し名簿の搜索である。

本来の図書館にはパソコンと生徒IDを使った簡便な貸し出しシステムが採用されている。しかし、なし崩し的に図書室と相成ったこの教室にはそのような御大層な代物はない。そのため手書きの貸し出し名簿が必要になるのだが……。肝心要のそれは溢れかえった書物の山に埋もれてしまっていた。まさしく鉱山に埋蔵された金のごとし。搜索は困難を極めた。一体以前の管理人は何をしていたというのか。宮史がそんな愚痴を言いたくなるのも宜なるかな。

だが宮史は安請け合いをした自身の浅はかさに対する後悔をすぐにやめていた。

現実と向き合い、それに即して生きる。それが朝倉宮史の第一信条だった。現実には即していない事象に囚われることなく思考し、行動することを是とするのである。したがって宮史が後悔に囚われることはない。

それは『どう生きたところで人生は後悔の連続である。それ故に後悔などしても仕方なく、意味もなく、価値もありはしない。後悔をしている暇があるなら今この瞬間から悔い改め努力し、最善の未来を手繰り寄せるべきである』という現実には即した思考の結果だった。

本を手にとってはしまい、しまつては手に取り、またしまつ。そんな単調な作業を小一時間続け、いつまで続くのかと宮史が思い始めたころ、床に散らばる本の隙間からファイルの一端を見つけた。周りの本を払いのけて宮史はそのファイルを手取る。表紙には貸出記録と記されていた。ホッと一息吐く宮史。ささやかな達成感で二日に渡る孤独な作業を労ってやるのだった。

慰労の時間も程々に、貸出記録を開いてみた宮史は

「……阿藤梨絵」

さっそく後悔の種を見つけることになる。

。

宮史は携帯を片手に日暮れた街に行く。開いたサイトの名は情報統合サイト。何とも色味とセンスに欠けたネーミングだと宮史は常々思う。

第二図書室の貸出記録には「阿藤梨絵」の名前で本が貸し出されていた。返却された様子もなかった。無視することもできたのだが、見過ごして面倒なことになっても困る。誰が困るかといえばそれは管理を任されている宮史に他ならず、仕方なしに宮史は阿藤梨絵の正体を突き止めることにしたのだった。そのための情報統合サイトである。

このサイトは会員制で情報交換を主とするものである。質問をするにも、質問に寄せられた回答を閲覧するにもポイントを必要とする。ちなみに回答は、自分でした質問に対するものしか閲覧することとはできない。知りたいことは自分のポイントで、自分で質問しなければならぬということだ。

ポイントを溜めるためには他者の質問に回答をする必要がある。ただ回答をするだけではなく、質問者にポイントを使わせて情報を閲覧させなければならないのだ。質問者が回答を閲覧するのに使用したポイントがそのまま回答者のポイントになる仕組みである。ちなみに閲覧に必要なポイントの量は回答者の裁量に委ねられている。

しかし質問者もむやみやたらと閲覧をしてくれるわけではない。少ないポイントでより有益な情報を得るため、彼らはいわゆる品定めをする。そこで回答者は各々の回答にタイトルをつけて質問者の興味を惹き、或いは他の回答より閲覧に必要なポイントを低くすることで情報を閲覧させるようにするのだ。この情報とポイントのやり取りによってこのサイトは成り立っている。

サイト内は全国、都道府県、市区町村、企業、学校等々、多くのコミュニティ毎に分割されている。質問者は最も効率よく情報の集

まるであろうコミュニケーションを選択して質問をするのだ。

宮史はそこから、自身の通う大学がある市を選択した。学内で流れる「阿藤梨絵」の噂が市内でも知られているかどうか確かめるためだ。宮史はポイントを使って質問する

阿藤梨絵さんを探しています。彼女について知っていることを教えてください。

。

「阿藤梨絵さんを探しています……」

時を同じくして、情報統合サイトにアクセスしていた荻月梨穂は、そんな書き込みを目を止めた。

噂の流れる鈴帝学園大学に通う彼女も、当然のごとく「阿藤梨絵」の噂を耳にしたことがある。このサイトでもしばしば話題になったし、裏サイトなどに行けば、知り合いが阿藤梨絵の呪いで怪我をしたのだ、事故に遭ったのだという話で持ち切りになることもあった。そういった口コミがこの噂の伝播に拍車をかけたことは言うまでもない。その結果が現在の学内に広がる見えない疑心だった。

梨穂も以前から阿藤梨絵の正体に興味があつた。しかし数日前に女子が一人行方不明になったという噂が流れて以来、多くの人間がこの話題に触れたがらなくなってしまうのが現状である。この質問にも恐らく回答は来ないだろう。来てもせいぜい忠告がいいところか。そのくらい、皆噂を忌避し始めていた。

だが逆に、荻月梨穂という人間はよりその興味を強めていた。何故なら彼女は愉快なことに対して目がない享樂主義者^{ヘドニスト}だから。呪いへの恐怖などこれっぽっちも持ち合わせていない。問題は面白いかな否か、それだけである。

だから今、この質問に遭遇できたことは彼女の好奇心を一層加速させた。彼女は未だ誰の回答もない質問にすぐさま回答することに

決めた。

私も阿藤梨絵さんを探しています。良かったらお会いしませんか？連絡先は本文に

さて、梨穂が今現在いるのは学内で最も古い校舎、三番校舎一階最奥の教室である。以前は美術系のサークルが活動していたそうなのだが、いつの間にやらその姿を消してしまっただけ。その当時の名残と思われる美術道具は教室に放置されたままとなっていた。こんな所に好き好んで訪れる者などいない。梨穂は持ち前の変人さ故に、時たまかような場所を訪れては時間を潰すのだが……。

そこへ突然、一人の女子がやって来た。

想定外の出来事は愉快な未来を予感させ、梨穂の好奇心を刺激する。彼女は女子を上から下まで観察した。

体軀はやや小柄。肩口あたりまで伸びた髪の毛は茶色がかった黒で、それが不安げな面持ちの少女をどうにか明るく見せている。しかしながら自信なさげに俯くその様子から、全体的に暗い雰囲気を漂わせる少女だった。

「何か御用ですか？」

女子の観察を終えた梨穂はにこやかに話しかける。それでも表情の優れない女子は遠慮がちに口を開いた。

「荻月梨穂先輩ですよ」

確認するような女子の言葉に、はいと短く肯定する梨穂。それを聞いた女子は勢いよく頭を下げて

「お願いです！友達を、阿藤梨絵の落とし物から救ってください！」
と言った。大きく、切実な声だった。その唐突すぎる申し出を梨穂は「いいですよ」

二つ返事で了承していた。あまりにもあっさりとした返答に女子は言葉を失う。既に梨穂の中では予感が確信へと変わっていた。これは面白いことになる、と。梨穂は口元をますます愉悦の形に変えて

「ただし。面白くないとだめですよ」
享樂的な一言を付け足した。

。

「私も阿藤梨絵さんを探しています。良かったらお会いしませんか。連絡先は本文に……」

宮史はそのタイトルを見て、閲覧するかどうか迷っていた。

裏サイトを見て回った宮史は、予想以上に多くの人間が「阿藤梨絵」の噂を避けたがっていることを知った。そんな中で、こうもあっさりと寄せられた回答を信用していいか決め難かったのだ。ポイント稼ぎのデマとも限らない。結局、開くか否かの判断を下す前に宮史は目的地に到着していた。さびれた敷地内に立つプレハブ小屋。その古びたドアを開け放つ。

「おー、来たか朝倉」

「こんにちは、所長」

奥からの間延びした呼びかけに定型文のような挨拶を返す宮史。こは乙山市生活相談事務所。何を隠そう、宮史のバイト先である。

元々は乙山市民の生活水準の維持向上に努める半公的組織、つまるところが便利屋だった。半公的というだけあってその維持費は市によってまかなわれており、それに加えて毎月市に提出する依頼解決報告書の内容に応じて報酬が支払われる仕組みとなっている。しかし今現在ここに勤務するのは所長一人にバイト一人。舞い込む依頼も探し物程度。一番多いのはただの愚痴を言っただけで帰る依頼人という有様である。依頼主を全国規模に広げたところで、まともな依頼が増えることもなく、増えたのは聞かされる愚痴の数だけ。ついでに所長の愚痴まで増えたのは宮史にとって誠に悩ましい問題だった。現在では市からの資金も必要最低限に留められており、もはや壊滅寸前ともいえる状態なのだが……。それでもこの事務所が今日も存続しているのは所長曰く、過去の業績のおかげらしい。

その所長は正体に不明な点の多い美女である。といっても普段は飾り気のないワイシャツとタイトなパンツを着こなし、髪は面倒くさそうに後ろで束ねている。そのうえ度の強い眼鏡がレンズの奥にその美貌を押し隠してしまっていた。バイトとして通う宮史でさえ、その素顔を見たことは一度しかなかったりする。

「依頼でも持ってきたか？」

所長室は、使用者ゼロの事務員の机が並ぶ一室の奥にある。そこから現れた所長の問いかけ。その裏には、どうせないだろう、という嫌味が込められていた。出勤の際の挨拶代わりみたいなものである。いつもならここで、所長の期待通りにノーと答えざるをえず、宮史は歯噛みすることになるのだが……。

「いいえ。代わりにヤボ用が一つ」

今回はそうではない。そうではないのだが……。所長の思惑通りにならなくとも依頼がないことには変わらない、という事実が宮史は残念でならなかった。

「なんだ、金にならない話か。全く何だってマトモな依頼がうちには来ないんだろうな」

思惑通りにならなかったからか、はたまた金にならない話だからか、所長は不機嫌そうな顔でばやいた。仮にも給料をもらっている身の宮史はその疑問について、現実的思考を以て真剣に考えることにする。……本来市民の生活を救済するはずの組織からまず救済しなければならぬ、という皮肉な事実にはこの際目を瞑ることにした。言ってもどうしようもないこともある、というのもまた現実である。「もっと依頼人が足を運びたくなくなるような場所にすればいいんですよ」

「例えば？」

「室内を清潔に保つとか」

「この上なく清潔じゃないか」

所長は事務室を見渡しながら言う。

「そりゃ事務員がいなければ散らかりもしないでしょうね」

清潔感というよりは生活感の欠落した室内に宮史のため息が響き渡る。とりあえず条件クリアと判断したのか、所長は「他には？」と促した。引き続き宮史は依頼人増加のための手立てを模索する。

「あとは……。接客対応は常に丁寧かつにこやかにする」

「……それは物凄く難しいな」

宮史の提案に、所長は心底うんざりした顔で本音を漏らした。上司の怠慢に宮史は非難の声を上げる。

「そうでもない」と誰も頼ってくれないですよ」

こんな所、という言葉で宮史は辛うじて飲み込んだが、それを察した所長はムツとした顔をしていた。この表情を前にしたら依頼人も即リターンして泣き寝入りした方がマシだと思っに違いない、と宮史は思った。

「……そうはいつでもさ」

「合理主義者のくせにどうしてそういうところで面倒くさがるんですか、あなたは」

「合理主義者だからだ。そんなことするより実績を上げた方がよっぽど合理的じゃないか」

「実績を上げようにも依頼が無いんじゃないでしょうか」

「ならもう依頼人なんか来なきゃいい」

「現実逃避はやめてください」

年甲斐もなくごねる所長に宮史は容赦なく現実を浴びせかける。しかし所長も負けじと、宮史を見返し反論を始めた。

「大体な、お前のその不機嫌そうな顔だって丁寧かつにこやかな接客対応とは程遠いだろうが」

「目つきが悪いのは認めますがこれは俺の無表情です。決して機嫌が悪いわけじゃありません。そもそも、そんなことを言うのは所長くらいですよ」

所長の物言いにすかさず反駁する宮史。だがその声色に反感はなく、純粹に事実と異なる点を指摘しているだけのようだ。実際、宮史は感情の問題ではなく、ただ単に事実を述べているつもりだった。

「いいや、きつと依頼人が来たらどうして不機嫌そうにしているのかと思うだろうよ」

「まさか。大体、それは確認のしようがないでしょう」

自信たつぷりに言い放つ所長に対し、あくまで冷静に宮史は受け流す。それでも所長は不敵な笑みを崩さない。

「なら私が直接聞いてやろう。ああ、早く依頼人が来ないものか」

「さつきと言ってることが真逆ですね。……まあいいですけど」

先刻とはうって変わって愉快気な様子の所長に、淡々と言葉を返す宮史。その無表情が驚愕に変わる様を見届けてやろうと所長がほくそ笑んでいたそのとき。プレハブ小屋のドアを叩く音と共に

「ごめんくださーい」

という声が聞こえてきた。

「お、早速依頼人が来たな」

計ったようなタイミングにますます嬉々とする所長。そんな彼女に宮史は不変の無表情のまま

「さあ所長。丁寧かつにこやかな接客対応を実践するチャンスですよ」

冷や水を浴びせかけた。すると、意地悪い笑みから一変、冷めきつた表情をした所長は逃げるように所長室へと閉じこもってしまった。

これで依頼人に余計なことを訊ねられる心配はなさそうだ。不安要素を的確に排除した宮史は応対に向かうことにする。ドアを開けるとそこには、一人の女子の姿があった。その女子は宮史を見て、明るい笑顔を向ける。

「やあ、宮くん！」

「千弥子さん。どうもご無沙汰してます」

快活な第一声に面喰らった宮史はおずおずと言葉を返す。同じ学習舎の、しかも面識のある人物が訪ねてくるとは思いもよらなかったからだろう。

彼女の名前は茶木千弥子^{ちやき ちやこ}。宮史にとっては上級生にあたる人物だ。明るい性格にお似合いの茶色がかった長い髪と大きな瞳。それとは

対照的に鼻と口は小ぶりな作りで、大人びたスタイルにはアンバランスな幼い印象を与える顔立ちをしている。が、その実この組み合わせが彼女に最もしっくりくるようにも思わせる魅力を放っていた。「今日はどうしたんですか」

千弥子は宮史が知る限り、とにかく明るい性格の持ち主である。ともすれば底が抜けたように明る。何があっても何とかなるさ、どうにかなるさと笑っている。厄介なことに何一つ根拠がない場合でさえも、である。そんな底抜けの楽観主義者オプティミストなのだ。……さら

に厄介なのは本当に何とかしてしまうところだったりするのだが。だからこそ宮史は解せない。彼女ならここを頼らずとも何とかなるさと笑って構えるだろうし、何とかするだろうと思っていたからだ。

宮史の問いかけに千弥子は表情を苦笑に変えて答える。

「いやー、今回は自治会からの依頼でね」

「自治会ですか。一体何です？」

実は千弥子、学生自治会の役員をやっている。これには宮史も大いに驚いたことを覚えている。だが、

「その前に、阿藤梨絵って聞いたことあるかい」

今回ばかりはその時以上に驚きを禁じ得なかった。

たまたま阿藤梨絵の噂を聞きつけたその日に、たまたま阿藤梨絵の名前を見つけてしまい、そしてたまたま学生自治会から阿藤梨絵に関する依頼を受けることになった。さすがの宮史も奇縁を感じずにはいられない。

だが、彼にとって偶然か必然かの違いなど瑣末なことにすぎなかった。

たまたま阿藤梨絵の噂を聞きつけたその日に、たまたま阿藤梨絵の名前を見つけてしまい、そしてたまたま学生自治会から阿藤梨絵に関する依頼を受けることになった、という現実にはそれ以上もそれ以下もありはしないのである。運命とか宿命とかいった言葉は、その現実に対する主観的な呼び名に過ぎない。

「はい。知ってます」

コンマ数秒の驚きからすぐに立ち直った宮史は簡潔に肯定する。それを聞いた千弥子は「それなら話は早いね」と満足そうに頷いた。「いくら噂とはいえ、いたずらに学生を不安に陥れる行為をこれ以上見過ごすわけにはいかない。だから、阿藤梨絵の正体突き止めてほしいんだよ」

そう語る千弥子の口調は珍しく真剣そのものである。それが宮史にはどうしても解せない。

「今回はいつもより真剣なんですね」

千弥子の常との差異を不安要素と捉えた宮史は、率直にそう口に出していた。その言葉に千弥子は「やっぱりそう思う？」と再び苦笑いを浮かべながら言う。

「……実は私の妹も落し物に関わったみたいでね。ここ最近不安そうにしてたんだよ。だからこれは私個人としても見過ごしておけない問題だね」

聞いて、宮史は合点がいった。千弥子に妹がいる、ということは宮史も聞き及んでいる。妹のことになると、樂觀主義者の千弥子に他に類を見ないほど真剣になるということも。

「わかりました。引き受けましょう」

宮史は二つ返事で了承した。といっても、姉妹の情にほだされたわけでは、決してない。結局は図書の中で探す羽目になったのだから依頼を受けても損はない。むしろ一石二鳥である。そう現実的に判断したに過ぎない。そもそも、久方ぶりのマトモな依頼を断る理由など宮史にはなかったのである。

依頼解決に向け思考をスイッチした宮史は、先ほど保留にしていた回答をすぐさま閲覧することに決めた。情報は多ければ多いほどいい。多少のリスクには目を瞑って、得られそうな所から手を伸ばさねばならない。そうして開いた回答には、確かに連絡先が記されていた。ご丁寧な学年クラス番号名前まで付いている。宮史はその学生の存在の有無等を調べてから連絡を取ることに決めた。

「それより宮くん」

素早く業務を開始した宮史に、突然千弥子の声がかかる。

「何でしょう」

宮史はごく普通に返事をした。……つもりだったのだが

「前から思ってたんだけど、どうしてそんなに不機嫌そうな顔をしてるんだい？」

言われて、否やの言葉を上げようとした宮史の耳に届いた所長室からのくぐもった笑い声に、宮史は今なら自分が不機嫌な表情をしているであろうと自覚した。

もっとも、千弥子の目にはずっと不機嫌そうな表情のままに見えていたのだが。

現実主義者と享楽主義者

四月二十八日

「あの、荻月梨穂って知ってますか？」

今度は男子が、女子に話しかけていた。視線だけを男子に向けて女子は答える。

「知ってるけど……。宮くん、今日も何だか不機嫌そうだね」

「……そんなに不機嫌そうに見えますか、俺」

訊ねた男子——朝倉宮史は、先日と同様の指摘を受けてしかめっ面で聞き返した。無表情を不機嫌そうと誤解されるのは宮史にとつて甚だ心外である。とはいえ、こう何度も指摘されている以上、少なくとも勘違いされるという事実からは目を背けるわけにもいくまい。何らかの対策を講じる必要性を感じていたのだが

「まあ大丈夫だよ」

ニコニコと笑う女子が宮史の懊悩をそんな一言で笑い飛ばす。ただ、一体何がどう大丈夫なのかは宮史にはわかりそうになかった。きつと彼女にもわかってないのだろうなと思ったりもした。

「……ああそれで、千弥子さん。荻月梨穂のこと知ってるんですか？」

「うん」

対策についてはさて置くことにして、改めて訊ねると、女子——

茶木千弥子は事もなげに答えた。が、

「放課後の乙姫さんのことでしょ？」

その答には意味不明の単語が含まれていた。

宮史が荻月梨穂のことを訊ねるに至った原因は、言うまでもなく先日の質問に対する回答である。回答に載っていた連絡先にメールを送った宮史の元に返ってきたのはたった一言

明日、集合場所と時間をお知らせします

とのこと。それ以上はコンタクトを図ろうとしても梨のつぶて。一切取り合ってはくれなかった。

そして本日、もうじき正午を回るというのに肝心の集合場所と時間はまだ知らされていない。ポイントを払った以上、このままとんずらされた日には目も当てられない。不測の事態に備えて、宮史は荻月梨穂という人間について調べてみることにしたのだった。

「放課後の……………、なんですか？」

「放課後の乙姫だよ。知らない？」

それが初っ端から「放課後の乙姫」である。宮史は言葉の意味を考えることさえ横着して千弥子に訊ね、そんな宮史を彼女は意外そうな目で見ながら聞き返した。

「知りません。何です、それ」

宮史はそんな珍妙な呼び名を持つ奇人変人に心当たりなどない。むしろあったなら、そしてそれが荻月梨穂だというのなら、宮史としては積極的に関わりたくないのが本音である。

「渾名みたいなものかな。他にも色々あるよ。図書室の妖精とか、屋上の天使とか……………。あと何があったかな……………」

「それを言うなら図書館の妖精じゃないんですか？あと屋上は立ち入り禁止だった気が……………」

「細かいことは気にしない気にしない」

千弥子が連発する摩訶不思議な呼び名にとてもじやないがついていけない宮史。ついていけないが現実的な指摘だけは忘れていない。あっけらかんと笑う千弥子に宮史は続けざまに質問をする。

「すると、有名人なんですか？」

「割とねー。学内のどこかにいて、悩みやら愚痴やら何でも話を聞いてくれるんだってさ」

「聞くだけですか？」

「いや、興味本位で手助けしてくれたりするらしいよ。面白い話を

すると面白い話をお返ししてくれることもあるとか。……………あと
一個渾名があつたはずなんだけど」

「何ですかそれ……」

次から次へと出てくる奇妙奇天烈な噂に混乱極まる宮史はそんな感想しか紡げない。

「噂は他にもあるよ。一日三回見ると不幸になるとか……」

「それじゃ同じ授業の人は高確率でアウトじゃないですか」

それでも現実的見地からの駄目出しには抜かりない。

「細かいことは気にしない。……………あと一個」

「まだ考えてるんですか。細かいことは気にしないんじゃない」

「気にしない」

その後も宮史は荻月梨穂についてあれこれと訊ねてみたが、千弥子も噂でよく耳にする程度でそれほど詳しく知っているわけではないということがわかった。特別親しい人間にも心当たりはないらしい。

「ところで千弥子さん。一つ頼みたいことがあるんですが」

不可解な荻月梨穂の噂に現実的指摘を入れる宮史を見て、渾名をも一つ思い出そうとしながら千弥子がかからかと笑う。そんなやり取りをもう何度か行つた後で、宮史はそう切り出した。

「ほいほい。何だい？」

かしこまる宮史に倣い千弥子は表情を改めてから答える。といってものにこやかなのは相変わらずだが。それには構わず宮史は要件を告げる。

「今月に入ってから事故に遭つた学生を調べてほしいんです」

宮史は生活相談事務所の人間として、教職員からの依頼を受けることもある。第二図書室の管理もその一つだ。その場合、宮史は大学側から必要な情報を聞き出すことができるのだが、今回の件は学生自治会からの依頼であり、大学側は一切関知していないのだという。そうになると、宮史は大学から事務所の間人ではなく一生徒としての扱いを受けることになる。仕方なしに宮史は独自に、あるいは

人伝に情報を集めなくてはならなかった。

「事故？……ああ、そういえばここ何日かで事故があったね」

「ええ。で、その事故に例の落し物が絡んでいるそうなんです」

「そういうことなら、お安い御用だよ」

落し物と聞き、千弥子も事情を察したようである。少なからず真剣な面持ちになってから頷いてみせた。

快く了解してくれる千弥子に、失礼ながらも少々の不安を覚える宮史。

「頼んでおいてなんですが……。本当に大丈夫ですか？いくら学生自治会とはいえ、大学側が簡単に教えてくれるかどうかは……」

「大丈夫、大丈夫」

その言葉を遮ってかんと笑う千弥子は、反らした胸を手で叩くという古典的な仕草を取りながら

「任しときなさいな！」

と言い切った。果たしてどこからその自信が湧き出てくるのか見当もつかなかったが、一応宮史は納得することにしたのだった。そうして二人の間に話題がなくなったかにみえたその時

「ああっ！」

千弥子が突然にそんな声を上げていた。それから嬉々とした様子で宮史を見る。

「何ですか？」

呆氣にとられながらも宮史はとりあえず一言で千弥子に訊ねた。

「思い出したよ！最後のもう一個」

「もう一個？」

「荻月梨穂さんのもう一個の渾名！」

「……………まだ考えてたんですか」

こればかりは宮史も予想だになかった。そのうえ、どんな渾名を告げられるのかも想像できなかった。だが

「美術室の令嬢だよ！」

「キャンパス内に美術室はないですよ」

現実的な観点からの指摘だけは間髪いれずに実行することができた。これにはさすがの千弥子も言葉を失い、今度こそ会話は途切れてしまった。

。

放課後を迎えた宮史の元に、ようやく荻月梨穂から連絡がきた。

午後五時に図書館、三階自習コーナー右端にて

とのことだった。わざわざそんな場所を選ぶあたり、図書室の妖精の名は伊達じゃないらしい。

指定された通りに宮史は図書館三階、自習室コーナーを訪れる。数人の生徒が机に齧りつくようにして勉強する様子を流し目に見つつ、宮史は右端の席に辿り着いた。

が、そこには誰もいなかった。時計を確認すると丁度五時を回ったところである。隣席に落ち着き数分待ってみても、誰かが訪れることはなかった。見ると、隣の席の机上には一枚の紙が丁寧に折り畳まれて置いてある。

手持ち無沙汰の宮史はそれを手にとって広げる。そこには一文、私はどこにいますでしょうか？

とこれまた丁寧な字で記されていた。

状況を素早く呑み込んだ宮史は、元の形に畳んだ紙をポケットにしまってから歩き出す。どうやら阿藤梨絵より先に荻月梨穂を探さなくてはならないらしい。

困った、とは思わない。困るより考える方が先だからだ。

宮史の思考は既にスイッチしている。荻月梨穂の思惑を推測することなど全くの無意味。どこだと聞くのだから見つければいい。た

だそれだけのこと。幸い荻月梨穂はこの大学内に確かに存在する人間である。阿藤梨絵などという実在しない人間を探すより遥かに気が楽だろう。

宮史は、つい昨日にコンタクトを図っただけの相手は無条件に信用してなどいなかった。したがってこうなることもある程度、考慮に入れていた。そのために今日一日、散々荻月梨穂について訊ねて回ったのである。

とはいえ、荻月梨穂については誰に訊ねてみても概ね似たような答えしか得られなかった。今現在、彼女について宮史が把握している情報はあまりに乏しい。

一つ、乙山鈴帝学園大学に在籍しており、宮史と同じ第二学年であるということ。

一つ、放課後の乙姫、図書室の妖精、屋上の天使、美術室の令嬢等、奇怪な二つ名を幾つか有していること。

一つ、学内のどこかにいて、見つかるだけでも幸運らしい。そのうえ悩みや愚痴など相談に乗ってくれたり、助言や助力をしてくれたりすることもあるということ。

一つ、一日に三回見ると不幸になるのだ、大事件が起きる前触れに現れるのだ、その他諸々の不可思議な噂もあるということ。

はつきり言って何もわかっていないに等しい。せいぜい宮史にわかったのは、荻月梨穂という人物が類まれなる変人だということくらいである。だが探すのが目的であるならこれだけわかっていれば十分だった。

彼女が放課後の学内のどこかにいるというのなら、心当たりから潰していけばいい。手始めに宮史は、屋上に向かうことにした。

キャンパス内にある建物のうち、屋上まで上がるものは多くない。宮史は手当たり次第屋上に足を運んでみたが、天使どころか人っ子一人見当たらなかった。

その代わりに、大きく「はずれ」と書かれた紙が屋上の出入り扉に張り付けてあるのを見つけた。

となると、残る手掛かりは千弥子が最後に思い出した渾名、『美術室の令嬢』だった。

……問題は宮史が知る限り美術室なるものがキャンパス内に存在しないことである。だがまだ詰みではない。宮史の手には次なる一手が握られている。

美術室の場所を教えてください

ポイントを使い、質問を書き込む。開いたサイトは情報統合サイト、選んだのはもちろん大学のコミュニティである。この情報統合サイトの最大の利点は、回答者が善意ではなく利益から回答を寄せる点にある。我先にとポイント欲しさに書き込む連中のおかげで、情報の集まる速さに関してはある程度の信頼がおけた。瞬く間に回答は集まり、宮史はそこから一つを選んで閲覧。目当ての情報の入手に成功していた。

。

通称美術室、それは三番校舎一階最奥の教室のことだった。聞くところによると、かつてこの教室は美術系サークルの活動場所として使用されており、一部の学生の間では現在でも美術室の名で呼ばれているのだそうだ。知名度の低さにかけては第二図書室と両雄並び立つのではと宮史は思う。並び立つたところで誰も知らないのでは意味がないか、とも思うのだった。

ちなみに宮史の管理する第二図書室があるのも三番校舎である。基本的に三番校舎には、何に使われているのかわからない部屋が数多く存在するらしかった。

通称美術室のドアの前に宮史は立つ。ここにいなければ情報統合サイトで直接荻月梨穂の居場所を質問する等の手を講じる必要がある。宮史はそのあたりのことを考慮しながら小さく二度ノックする。

中から返事があつた。ドアノブを回し、その扉を開け放つ。

時刻は六時を回つた頃。傾いた陽光が差し込む美術室の窓辺に、一人の女子が行儀よく佇んでいた。

「こんにちは。はじめまして、朝倉宮史君」

微笑みながら、女子は口を開いた。名前を知っていることから、宮史はこの女子こそが荻月梨穂であると判断する。

長く艶やかな黒い髪とそれに縁取られたうつすらとした微笑は、彼女がまるでこの美術室に置かれた芸術作品であるかのように思わせる。なるほど、美術室の令嬢の名に恥じない美しさだ、と宮史は率直にそう思つた。その声と口調も、おっとりとしていかにも令嬢らしい。少なくとも、図書室に現れず、あまつさえあのような書き置きを残していったことを悪びれた様子は露ほども見られなかった。「はじめまして。図書室の妖精さん。いや、今日は美術室の令嬢と呼んだ方がいいのかな」

「どちらでも構いませんよ」

揶揄するような宮史の応答にさえ梨穂はなお微笑を崩さずに返した。その表情に少々愉悦の色を加味して宮史に問いかける。

「それにしても、よくここがわかりましたね。ひよつとして美術室のことを知つてたんですか？」

「いいや、全く。わざわざ調べたよ」

殊更にうんざりした調子でこぼす宮史に梨穂はえらくご満悦である。きつと嗜虐指向があるんだろうなと宮史は思つた。

「それはご苦勞様でした」

「……最初からここだと教えてくれればご苦勞もなかったんだけどね」

「だってそれじゃ面白くないじゃないですか」

宮史の嫌味にも、やはりどこ吹く風。梨穂はさも当然というように言つてのける。納得のいかない宮史はあくまで現実的見地から否やをあげる。

「面白くする意味がわからない。大体、俺がこの場所に辿り着けな

かつたら荻月さんは待ちぼうけじゃないか」

「それもまた一興です」

「いや、困るでしょ」

しかしながら現実主義者と享楽主義者とは、とことん意見が食い違った。宮史が二の句を継ぐより先に梨穂が口を開く。

「確かに困るかもしれないですけど、それは私にとつてどうだっていいことなんですよ。だって私は、突然かくれんぼを始めた私の前に朝倉君がちゃんと現れるのかどうか、面白そうだから試してみようと思っただけですから」

今度ばかりは二の句が継げない宮史に対して、梨穂が続ける。

「それに、別に朝倉君が来なかったとしてもここで時間が過ぎるのを待つのはいつものことですから」

「その話本当だったんだ……」

多くの噂を話半分に聞いていた宮史が思わず漏らした呟きに、梨穂はにつこり微笑んで肯定の意を示す。この際であるから宮史は本日聞き知った噂について、その真偽のほどをいくつか確かめてみることにする。

「じゃあ愚痴や悩み事を聞いてくれるっていうのは」

「本当です」

「助言や助力をしてくれることもあるっていうのは」

「本当です」

「ときどき面白い話を聞かせてくれるっていうのは」

「本当です」

「なら一日三回見た人間を不幸にするっていうのは」

「それは嘘です。……けど本当なら面白そうですね」

最後に何やら不吉なことを言い出す梨穂に、宮史は今更聞くまでもない問いを投げかけていた。

「……なんでそんなことを」

対する梨穂も、言うまでもないと極上の笑みを浮かべたあとで

「そんなの面白そうだからに決まってるじゃないですか」

迷いなくそう言い放った。無駄に広い空き教室に残響する、確固たる思いが込められた一声だった。

「……享樂的なんだね」

「生まれつきなもので」

そんな梨穂をたった一言で評した宮史の言葉に、彼女はくすりと笑ってそんな言葉を返した。

梨穂の性格をおおよそ把握した宮史は確認するように梨穂に訊ねる。

「それじゃあ荻月さんが阿藤梨絵を探している理由もやっぱり……」

「ええ。面白そうだからです」

答えは予想通り。そんな梨穂に宮史は忠告の意味を込めて言う。

「面白半分で首を突っ込んで、痛い目に遭うかもしれないよ」

宮史の言葉に不思議そうに小首を傾げてから梨穂は聞き返す。

「呪いですか？」

首肯する宮史に梨穂は質問を返した。

「朝倉君は呪いを信じてるんですか？」

が、それがいけなかった。

「あるかもしれないし、ないかもしれない。あるかどうかわからないものは考えたって仕方がないと思うようにしてるんだ。信じようが信じまいがあるものはあるし、ないものはないんだからね。どんな現実的な可能性を以ってしても説明ができないとしたらそれはきつと呪いでしか説明できない。そのときは潔く呪いを認めると思うよ」

簡単な質問に講釈するかのような語り口でやたらと長ったらしく喋る宮史。口を挟む暇さえないその口上に、梨穂は少しだけ朝倉宮史という人間の本性を垣間見たようだった。宮史の性格を把握し始めた梨穂が今度は質問に廻る。

「それじゃあ阿藤梨絵の呪いはどうです？現実的な可能性とやらで説明できるんですか？」

「今のところはね」

宮史の答に梨穂は「やっぱりそうですか」と呟いた。そんな彼女に「阿藤梨絵の呪いが本物の方がいいの？」

と氣遣うような口調で宮史が訊ねてしまったのは、呟く梨穂の表情がどこか寂しげに見えたせいかもしれない。

「だったらいいなと思います」

「その方が面白そうだから？」

「ええ。まあ」

先ほどに比べてあからさまに曖昧な返事。そんな様子にますます不審がる宮史を余所に、梨穂は聞き返した。

「朝倉君はどうです？呪いはない方がいいですか？」

「そりゃそうさ。太刀打ちできそうにないものと張り合うのは遠慮したいからね」

即答する宮史。その本音に矛盾したものを感じ取ったのか、梨穂は一言だけ進言した。

「なら最初から関わらなければいいんじゃないですか」

「仰る通り。俺だって御免被りたいのは山々なんだけど……」

苦笑しながら宮史が濁した語尾に興味を惹かれた梨穂は「何か事情があるんですか？」と迫る。その好奇心を宮史は

「お金がかかっているかもしれないからさ」

身も蓋もない言葉で台無しにした。さすがに呆れかえったらしい梨穂の口からは、宮史を評する一言が咄嗟に漏れ出ていた。

「……現実的なんですね」

「生まれつきなもので」

宮史は先ほどの梨穂にならい、老けこんだ笑みと共にそんな言葉を返すのだった。

「でも、どうして阿藤梨絵を探すこととお金が関係あるんですか？」

「俺のバイト先って便利屋みたいなものだからさ。そこに学生自治会から依頼があったんだよ。阿藤梨絵を見つけてくれてね。それが俺の阿藤梨絵を探す理由」

梨穂からの新たな疑問を、宮史はややこしい自身の職種を簡潔に説明することで解消する。だが、

「便利屋さん……。そんな面白愉快的バイトがあつたなんて知りませんでした」

気がつけば梨穂から羨望を孕んだ眼差しを向けられていた。その視線にえも言われぬ不安を感じ取った宮史は、あくまで現実的見地から梨穂の興味を逸らそうとする。

「だっていつても俺は特別に雇ってもらってるだけだから。それに依頼を解決しても報酬を決めるのは役所の人だし、割に合わないと思うよ」

自分好みの職種を、それに就いている宮史が否定的に言うからか、梨穂は膨れっ面で抗議の声を上げる。

「面白ければそれでいいじゃないですか」

「いや、先立つものはお金でしょ」

しかしどこまでも意見の揃わない二人だった。宮史は小さく溜め息を吐くことで話を一旦終わらせ、

「ところで、阿藤梨絵の落し物の件だけ……」

とようやく本題に踏み込んだ。その矢先に梨穂は何かについたように「あ」と声を上げる。

「ひょっとして、朝倉君は自分で依頼を解決しないと困りますか？」

「まあ、そうなるね」

唐突な質問だった。宮史は首肯する。役所に報告した後に報酬、というかたちで給料が払われる都合上、宮史が依頼解決に関与することが必要条件となるのは言うまでもない。

「……………私、とってもいいこと思いついちゃいました」

答えを得た梨穂は、新しい玩具を見つけた子供のように嬉しそうな表情を浮かべて言う。とはいえ、いまひとつ無邪気さが欠けていたからだろう、「一応聞くけど……………。何？」と宮史は恐る恐る訊ねていた。そんな宮史に

「どっちが先に阿藤梨絵を見つけられるか、競争をしましょう」

梨穂は実に享樂的な提案を掲げてみせた。

「断る。協力すればいいじゃないか」

が、すぐさま断固反対を表明する宮史。現実的な提案も忘れない。

「それじゃ面白くないじゃないですか」

「だから面白くする意味がわからない」

しかしやっぱり意見の合わない二人だった。話し合いも益なしと判断したのか、梨穂は頭を振って言う。

「私は享樂的に、朝倉君は現実的に。主義主張を異にする私たちが手を取り合うなんてナンセンスです」

両の手のひらを上に向け、やれやれという仕草までとる。とうとう宮史も諦念の表情を浮かべ、それを見て取った梨穂は満足そうに立ち上がる。

「それじゃ朝倉君。お互い頑張りましょうね」

そしてそれだけ言い残して、美術室の令嬢は優雅に去って行くのだ。一人残された宮史の達観したような呟きが虚しく室内に木霊する。

「……………仕方ないか」

密告

四月二十九日

「阿藤梨絵について知っていること、ですか？」

女子が訝しげな声でそう問うた。その疑念に満ちた眼差しを受けながらも、朝倉宮史は平然とした様子で話を促す。

「そう。何でもいいんだ」

「噂に聞く程度です。拾ったことがばれると不幸になるとか、自分から告げると告げられた人が不幸になるとか」

答える女子の声には敵意に近いものが感じ取れる。聞き知れない生活相談事務所の見知らぬ人間、それも自分とさほど年の離れていない風貌の男に突然話しかけられ、先のようなことを訊ねられたら警戒するのが道理である。ついでに言えばその男の表情が何故か不機嫌そうに見えたとしたなら、それは詮無きことと言わざるを得ない。

「でもどうしてそんなことを私に聞くんですか」

「君の友人、平川由美さんが阿藤梨絵の落し物のせいで行方不明になったかもしれないからさ」

宮史は千弥子から事前に行方不明になったと噂される学生の名前を知らされていた。名前は平川由美。高等部からエレベーター方式で進学してきた女子で、高校時代からこちらで一人暮らしをしていたという。千弥子によると現在、二週間近く学校に来ておらず、そのうえ家族でさえ行方を知らないのだそうだ。

さらに宮史はその平川由美と高校時代から親交の深い人物の情報も入手していた。それが今、あからさまに宮史を警戒する女子、峰祥子だった。

「馬鹿馬鹿しい。そんな噂、デマに決まっているじゃないですか」
呆れたように話す祥子に対して、あくまで宮史は平坦な口調で言葉

を紡ぐ。

「そうかもしれない。でも少なくとも、平川由美さんの行方不明は事実だ。四月十五日以降に彼女の姿を見た人はいないし連絡を取った人もいない」

「学校に嫌気がさして閉じこもってるんじゃないですか」

奇しくも祥子の言い分はかつて宮史が噂好きの女子にしたものと同じである。だがそれさえ、今の宮史にとっては現実的な解答ではなかった。宮史はその根拠を余すところなく述べ連ねる。

「その事実は今のところ確認できていない。彼女の私生活に大きな問題は見られなかった。それは親友である君もよく知っているはずだ。それに彼女の家を訪ねてみても誰もいなかった。部屋の中に誰かが押し入った形跡もない。それどころか財布も通帳も確認できた。この状況だけ聞くと、まるである日忽然といなくなってしまったみたいだろう？」

つらつらと言い終えてから宮史は祥子に同意を求めるように視線を送った。その語る内容よりもそれを調べあげた宮史に対して祥子は気味の悪さを感じる。彼女は表情を益々険しくし、苛立たしげに言葉を返した。

「それで、阿藤梨絵の落とし物を拾ったことがばれたのが原因だとも言うんですか」

「噂の通りじゃないか」

平然とした宮史の言葉を

「あり得ません」

と一際強い調子で否定し、そのまま口をつぐむ祥子。俯いて地面の一点を見つめたまま動こうとしない。心なしか震えているようにも見えた。その様子から宮史は祥子が何らかの事情を知っていると推測したが、

「……………とにかく、知らないものは知りませんから」

再び口を開いた祥子に吐き棄てるようにそう告げられる。そのまま一方的に立ち去ろうとする祥子の背中に

「ああ、そうだ。最後にもう一つ」

宮史は平らかな声で呼びかけた。もはや隠そうともしない敵意に満ちた面持ちで振り返る様子に

「第二図書室つてどこにあるか知ってるかな？」

と問う。

「知りません。そもそもそんな教室聞いたことがありません」

「そう。ありがとう」

礼を言い終わるより早く再び踵を返した様子を見送りつつ、宮史は苦笑気味にひとりごちる。

「一応、そんな教室の管理人なんだけどね」

四月三十日

「暇だな」

「だったら依頼を手伝ってください」

所長室から流れてきたばやきに、宮史は容赦なく突っ込んだ。

「やんない。割に合わないさうだし、合理的じゃないな」

無駄を嫌う乙山市生活相談事務所所長は間延びした声でそんな返事をする。仕事のない人間が合理性を説くのも如何なものかと宮史は思うのだが、言ったところでこの合理主義者が意見を曲げることはない。宮史としては諦めるほかない、というのが現実だった。ただし望みがないわけではない。

「とかいって、本当はどうやって合理的にお金を稼ごうか考えてるんでしょう」

彼女は目的のために合理性を重んじる。そして彼女の目的はお金と情報を手に入れることである。お金と情報は合理的に生きるための資本となり得るからだ。つまるところ、宮史にできるのは合理的にお金や情報を得られそうな餌を、彼女の前にぶら下げてやることくらいだった。

「当たり前だろう。世の中は合理的に生きられるように出来ているんだ。わざわざ非合理的な生き方をするつもりはないよ」

「……所長はそんなだから結婚できないんですかね」

今まで何度となく聞かされた所長の持論に対して呆れつつ宮史が言葉を返すと、多少は思うところがあるのか不機嫌そうな声が返ってきた。

「随分な物言いだな。大体、我が国の女性の平均初婚年齢は二十八・三歳。私はまだ二十七だぞ」

「来月で二十八ですよ」

「まだ小数点以下があるだろ」

「四捨五入で切り捨てられる小数にどれだけ勇気づけられてるんですか、あなたは。そろそろ現実を見ましようよ」

宮史の冷やかな物言いに所長はとうとう黙る。だがそのすぐあとで「ま、お前の性格じゃ将来同じことを言われることになるだろうけどな」

などと言い返した。

「まさか」

心外だという思いで呻く宮史。しかし彼にも思うところがあったのか、それ以上反論はなかった。しばし沈黙の後、お互い泥仕合になるのを覚悟で物申してやろうかと思いついた頃

「こんにちは！」

ブレハブ小屋のドアが勢いよく開かれた。何かと所長が事務所員の部屋に姿を現す。そんな彼女に入口に立つ人物、茶木千弥子は会釈のつもりなのか勢いよく頭を下げてから室内に足を踏み入れた。

「ああ、千弥子さん。丁度よかった。いくつか報告しておくことが」「ほいほい、なんだい？」

近づいてくる千弥子に対し、宮史は声をかけた。誰も使うことのない事務員用の椅子を勧めてから宮史は話し始める。

「平川由美の足取りについてですが、彼女の最後の足取りは密告された日の前日、つまり四月十五日ですね。それ以降は誰も彼女の姿

を見ていないし誰も連絡を取っていません。周辺でも彼女のことを見た人間がいないか調べましたが、手掛かりはありませんでした」
「相変わらずよくやるなあ……」

一個人が一日で調べたとは思えない情報量を事も無げに報告する宮史に、所長が呆れ顔で呟く。宮史の働きぶりを実際に目の当たりにするのが初めてである千弥子も、驚きに目を見開いていた。それには構わず宮史は続ける。

「それから彼女のアパートを訪ねました。大家は確かに十五日に彼女が帰ってきたのを確認したそうですが、それからは見ていないそうです。無理を言って部屋の中を見せてもらいましたが、荒らされた形跡も誰かが出入りした様子も特にありませんでした。他の住人も不審な物音などを聞いたりはしなかったそうです。部屋から特に持ち出された物はありません。財布も通帳もそのまま。彼女の交友もあたってみました、変わった様子はなかったようです」

「……それだけ聞くと何だかある日突然に消えてしまったみたいだね。それこそ密告をされたから」

必要なことを喋り終えて宮史が黙った後を、千弥子が与えられた情報を元に感想を述べて継いだ。それを受けて宮史は更なる推論を挙げる。

「ええ。ですが例えば、あらかじめ平川由美が失踪することを知っていた人物が事前に密告をしていたとしたら、結果的に『密告をされたから行方不明になった』という事実ができあがります。これなら密告による不幸も現実的に説明がつきます」

「それを知っている人物っていうのは……」
「犯人と見ていいでしょうね。無論、犯人自ら行方不明にさせてしまうのが一番手っ取り早いですが」

宮史は当たり前のように告げる。その現実を前に、千弥子は一拍の間を要してから訊ねた。

「それで、宮くん。その犯人の見当はついてるの？」
対する宮史は一拍と置かずに答える。

「先ほども言ったように、平川由美の失踪を事前に知っていれば密告が成立します。彼女の失踪の原因を知っている人間がいるとすれば、峰祥子が一番怪しいでしょうね」

宮史の答に少なからず気落ちした声で「そっか」と呟く千弥子。その後で

「それで、祥子ちゃんには話を聞いた？」

と訊ねてきた。宮史は千弥子の様子とその言葉を訝しんで聞き返す。「祥子ちゃん？ひよっとして千弥子さん、彼女と知り合いなんですか？」

「あ、そっか。言ってなかったっけ。祥子ちゃんと由美ちゃんはね、私の妹の友達なんだよ」

千弥子の説明で、宮史の疑問が氷解する。由美が失踪した理由を知っている人物が怪しいとなれば、まず疑いがかかるのは祥子である。祥子が疑われたことに対して千弥子は驚かずに落胆した。それは二人のことを見知っている千弥子が、祥子が容疑者であることに気が付いていたからだろう。それが事実でないことを期待し、しかし宮史にその可能性を指摘され落ち込んだのだ。とはいえ、それはあくまで可能性。そんな不確定的な数字など、底抜けの楽観主義者は笑い飛ばす。

「それで、祥子ちゃんに話を聞いたんだよね？」
気を取り直して再びされる千弥子の問いかけに、宮史は先日の祥子の様子を思い出して苦笑しながら答える。

「ええ。かなり嫌われてしまったみたいですが」
表情とは裏腹に宮史の声音は淡々としている。不気味な噂とそれに関わって失踪した友人のことを嗅ぎ回る宮史が嫌悪されるのは道理。そんなことはいちいち気にかけるに値しない。必要最低限言葉が交わして情報を得ることが出来さえすれば宮史にとっては何一つ問題ないのだから。

「しかしまあ、何かを知ってそうではありましたね。また話を聞いた方がいいかもしれません」

再度、宮史は祥子の様子を思い出す。俯き震え、逃げるように去って行った祥子。果たしてあれは、罪の発覚に対する怖れだったのだろうか。それとも他の何かだったのか。

。

とある校舎、立ち入り禁止の屋上に二人の女子の姿があった。一人は風になびく長い黒髪を優雅に押さえつけ、天使を彷彿とさせる優しい表情で空を眺めている。もう一人は対照的に俯いたまま直立しており、表情は風にさらわれて乱れる茶色がかった髪に隠れてしまっていた。

「それで、伽弥子さんが拾った落とし物がお友達に見つかってしまっ
たと」

黒髪の女子、荻月梨穂はもう一方の女子に問いかける。訊ねられた茶髪の女子は風にかき消されそうなほどか細い声で返事をした。

「……はい」

「そしてそのお友達が行方不明になってしまった、と」

「………はい」

デクレッシェンドで紡がれる返事を聞きながら、梨穂は改めて女子を観察していた。彼女の名前は茶木伽弥子^{ちやき かやこ}。学生自治会役員で有名な茶木千弥子の妹である。

「……私のせいです。私が落とし物を預けちゃったから……。私が落とし物を見つけられちゃったから……。私が落とし物を拾っちゃったから……。私のせいで由美ちゃんが……」

それを思うと、何故こうまで対照的かと梨穂は思ってしまう。千弥子が底抜けの樂觀主義者であるのに対して、茶木伽弥子という人間は底無しの悲觀主義者^{ペシミスト}だった。そのことを二回目のコンタクトにして理解した梨穂は、集合場所に屋上を選ぶんじゃないかったかな、などと不安になったりしていた。

「大丈夫ですか、伽弥子さん。飛び下りたりしないでくださいね」

などと、梨穂がおどけて声をかけてみても

「……はい、わかってます。私が落ちて死んだら荻月先輩が困りますし、何よりお姉ちゃんも悲しみますから……。どんなに嫌でも自分じゃ絶対死ねません……」

この調子。常人なら堪りかねて投げ出すに相違ないが、享楽主義者の梨穂は内心で愉快な人間に巡り逢えたということを素直に喜んでた。これで演劇サークル所属というのだからこれまた愉快である。一体どんな劇を演じるというのだろうか。喜劇さえ悲劇にしかねない悲観ぶりある。

とはいえ何かの間違いで本当に飛び降りられて悲劇が起きるのはやや困る。梨穂は話題を元に戻すことにした。

「えー……。とりあえず私はそのいなくなつたお友達を探せばいいんですか？」

伽弥子は「友達を阿藤梨絵から救ってください」と言った。聞くところによると友人は、入学直後に伽弥子が落し物を持っていたのを見つけてしまい、伽弥子を気遣つてその落し物を預かったのだという。当然梨穂は、そのまま行方知れずになつてしまったと専ら噂になつているその友人を探してほしいのだと思ひ込んでいた。だが「いえ、それもそうなんですけど……」

歯切れの悪い伽弥子。梨穂の顔に疑問符が浮かぶ。しばらく何かを言おうとしては口に出せず、俯いてしまふ伽弥子を梨穂は慈愛の微笑みを湛えながら待っている。だがその笑顔の裏で、またしても愉快的予感を感じていた。むくむくと膨れ上がるその予感に口元が緩みそうになつた頃、ようやく伽弥子が口を開く。

「あの……。私の拾つた落し物を持っていた友達を助けてほしいんです」

「ですから、お友達を探すんじゃないんですか？」

伽弥子の言わんとするところを理解できず、梨穂は念を押すように聞き返す。すると伽弥子は意を決したように顔を上げ言った。

「私の拾つた落し物を持っていた、もう一人の友達を、……祥子ち

やんを助けてほしいんです」

「もう一人……？」

そう。伽弥子の落し物を見つけてしまい、そのまま受け取った友人は一人ではなく二人だった。そしてそのうち一人は現在行方不明。然らば、もう一人に何かが起こる可能性も否定できない。

「これはますます面白くなりそうですね……」

不謹慎ながら、梨穂はとうとう口元を緩めてそう呟いた。強風に紛れた呟きは誰の耳にも届かず漂う。

。

「そうだ、宮くん。これ、頼まれてたもの」

淡々とした宮史の報告がひと段落すると、千弥子は鞆からプリントを取り出して宮史に手渡した。

「何を頼んだんだ？」

「今月に入ってから事故に遭った学生のリストです」

興味を示した所長の問いに簡潔に答えてから、宮史はしげしげと千弥子の姿を眺めた。

「しかし本当によく調べてくれましたね……」

「だから、任しときなさいって言ったでしょう？」

その視線を一身に浴びながら千弥子はふんぞり返ってそう言った。その得意気な表情から一転、ケロッとした笑顔で訊ねてくる。

「でもこれ、何に使うんだい？」

そんな彼女に、宮史は先ほどから眺めていたノートパソコンのディスプレイを向けてみせた。

画面に映し出されていたのは掲示板形式のサイトで、名前だけの書き込みが何件かされている。

「これは……？」

「これは『密告サイト』です」

疑問符を浮かべて画面を見つめる千弥子に宮史が説明を始めた。

密告サイト。

その名の通り、阿藤梨絵の落し物を持っている人間を告げ口するサイトのことである。密告されたからといって不幸になるというわけではないのだが、密告した側はそれだけでも憂さを晴らすことができる。密告は誹謗中傷に近い、嫌がらせ感覚でされるようだった。サイトには既に十人ほどの名前が書き込まれていた。落し物の噂が流れ始めた一月に一件。そして三月には二件。だがよく見ると、残りの書き込みは今週に入ってからされている。

明らかに異常とわかるペースアップ。そのきっかけとなったのが平川由美の失踪のようだった。今からちょうど二週間前に、彼女の名前は書き込まれている。

「それにしても醜いもんだな。密告なんて。されて事故に遭った人間としては不合理極まりないだろうけどな」

いつの間にやら千弥子と共に画面を覗き込んでいた所長が言う。宮史は手渡されたプリントに目を通しており、千弥子もどう返事したものかわからず、所長の独白が続く。

「世の中は合理的に生きられる。非合理だってどうにかできる。だが不合理だけはどうしようもない。……十年前もそうだった」

十年前。その単語が出てきた途端に、室内に自然と重たい空気が漂う。何か言いたくても言えない、そんな沈黙がしばらく続くかと思われた時

「これは……」

ディスプレイを凝視したまま呟いた宮史が沈黙を破った。助け舟を得たように千弥子が素早く反応する。

「どうしたの、宮くん」

そんな千弥子に、宮史はディスプレイとプリントを同時に差し出す。それらを数回見比べた後で、千弥子は絶句した。

今週中にその名を密告サイトに書き込まれた学生全員が事故に遭っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9612p/>

lst

2011年11月1日17時09分発行